特252
319

慶喜讃仰

玉置韜晃述

本派本願寺

始

特252
319

慶喜讃仰

目次

一、機會を見失はないこと……一
機會きいろこと……一
或る婦人の告白……四
食前の用意……七
對食の詞……二
横川法語と報恩講式の一節……二
機會と僥倖……六
二、教養について……八

昭和十二年
帝國圖書館藏

平生心是道……一八
一處四見……二一
鐘と旅僧……二五
支那の見聞……二七
たしなみといふこと……三〇
三、佛心者大慈悲……三三
慈光中の生活……三三
慈悲は智慧より……四四
母性愛……四七
四、眞宗行者の生活態度……五一

慶喜讃仰

一　機會を見失はないこと

――機會といふこと――

ながい間、皆さまから待ちまうけられてゐました　御法主様の御慶事が、このたび、にぎにぎしく御擧行になりますについては、御同様に心からおよろこび申し上げたいものであります。この再び遇ふことのできない御慶事にあはさせていたゞくことを深い因緣ごとと心得へて、この尊い機會を見失はないやうにしたいものであります。

機會（きくわい）といふことは、普通に　ばあい　をり　まぎは　はずみといつたやうな意

味でありますが、このことが私たちの生活には非常にだいじな役割をもつものであります。機會をとらへるか、見失ふかといつたことで、生活の上にすぐに大きな變動をおこすものであります。機會をたくみにとらへたものは、意外な成果をおさめ、それと反對に、好機會をみすみす見失つたものは、生涯頭のあがらぬ悲みに泣かねばならぬことになります。

旅行をいたしましても、僅か一分間の機會をとりはづしたために、とうとう、終列車に間にあはず、徒らに、高い宿賃を支拂つて一泊せねばならぬことにもなり、さらに、くだらない愚痴をこぼして、時計の正確でなかつたことにいらだつてみたり、停車場にかけつける直前の電車の故障をかこつてみたりして、いたづらにいらいらせねばならぬ苦い經驗をもつた方々も少くないだらうと思ひます。

古の聖者の警句に「寶の山に入つて、手をむなしふしてかへる」といふ御しめしがありますが、折角、寶の山に入りながら、その好機會を見失ふて、空手でか

へつては、なんとしても殘念なことであります。

佛教では、機といふ字については、いろいろに解釋されてゐますが、そのうちに、機に可發といふ註釋を加へてゐます。それは恰度、弓に矢をつがへて、力いつぱい滿月のやうにひきつめて、今やまさにきつて放たうといふその時を可發、とりもなほさず、機といふことであるとのお示しであります。

また、私たちの現實の立場をも、機といふ字であらはされてゐますが、この場合は根機と熟さるべきでありますが、そのうちにもまた大切な機會といふ意味も含まれてゐて、只今の私たちの立場は、進むか、退くか、佛となるか、鬼となるかといふ大切な機會でもあります。

「死すべきときに死せざれば死にまさる恥がある」とは、古から日本人獨特の誇るべき教養であります、昔の武士が死に場所をさがしたとか、死のきつかけを見のがさなかつたときいてゐますが、この誇るべき教養こそ、よく國を守り、よく

節を全うじたものでありませう。

——或る婦人の告白——

昨年のことですが。總會所の法義示談日に、次のやうな出來事がありました。それは、顔に負傷してなまなましい血のしたたつたまゝ、年頃三十七八の粗末な服裝で頭の髪も無造作につかねた婦人が、法義示談の席のかたすみにつつましやかに列席してゐられました。なにか深い事情のある方だらうと思ひながらも、どうしたことか、その方と一遍膝をつきあはして、ゆつくり話あつてみたいやうな氣もちでもつて、法義示談の席を終へたのでした。ところが幸にもその方がすぐに訪ねてくれたものですから、ゆつくり話しあふ機會を得たことでした。その方は、大阪の築港のハシケ船の家内だといふことで、お話によると、いふにいへない惱みから、可愛ざかりの女の子をあとにのこして自殺しようと決心して、築

港から大阪驛までかけつけたのでしたが、ふと、おさない時、母につれられてお手つぎの寺に參らせていたゞき、お同行たちの心からなるお念佛の聲のうちにしたつた機會を思ひ浮べました。そこで、今生の思ひ出に御本山さまに心ゆくばかり參詣してこようとて、京都に參りお晨朝に參詣したところが、はたして、子供心に深くこがれてゐたあのなつかしいお念佛の聲が、御堂ぢうにひゞきわたつてゐましたので、うれしいやら、なつかしいやら、やれやれ、宿望が達せられたとの喜びから、自分もまた口のうちでお念佛をとなへさしていたゞいたことでありました。そのうちに、お晨朝の御緣もすみましたので、なんとはなしに、のびのびした　ほがらかな氣もちで、下向したのでしたが、多數の方々が、おそろひで、どこか、めあての場所にゆかれるやうに見うけたものですから、その方々にお尋ねしたところが、總會所で尊いお說敎を拜聽するのだとのことでありましたから、それでは、私も今生のおいとまごひに一席の御說敎をきかしていたゞかうと

思ひまして、その方々のあとについて、總會所におまゐりをさしていたゞきました。ところが、そのあとでなほ百五十人ばかりの方々が居のこつてゐられたものですから、私もついそのまゝゐのこつてゐましたところ、いまから法義示談が開かれるとのことでした。まことに深い因縁ごとだと思ひまして、法義示談をきゝましたことでした。不審の點はゆつくりきくやうとのお示しでありましたから、その席でとも思つたのですが、なんだか多人數の前ではあまりに深刻すぎることでもあるために、たゞ今お訪ねしたやうな次第ですとのことでありました。それからその方は三日間、毎席かゝさず、眞劍な聽聞をつゞけたのであります。四日目の朝、きはめてほがらかな氣分でもつて、お慈悲の尊さに心からなる讃嘆をさゝげたあとで、主人や子供に對する過去の氣まづさをすべて清算して、いさみのお念佛とともに築港へとかへられたことでした。

この事實について味つてみましても、私たちは、ふとした、機會を見失はないやうにしたいものであります。夜おそく大阪驛の待合室での、昔なつかしい思ひ出が、また、それはおさない時であつたとはいへ、お念佛になつかしむだことの因縁が、自殺からこの婦人をすくつたばかりでなく、み佛のお慈悲にまかせきつて、過去のすべての氣まづさを清算した喜びの日暮にたちかへらしたことに深い味ひがあると思ひます。

——食前の用意——

普通一般に宗教的な家庭では、三度の食事をいたゞく前に、合掌禮拜することが習慣となつてゐるやうであります。しかるに、近頃は物質文明の影響とでもいひませうか、かうした宗教的な美風が、だんだんなくなりつゝあることは遺憾千萬なことだと思ひます。

「御飯をおがむなんてなんのことだ！　御飯は米ではないか、百姓のつくつ

た米をおがんでなんの意味があるのか、そのひまがあれば、すべからくはやく食事をして、時間の經濟をはかつてはどうか、馬鹿らしいことだよ」とは近代人のいひぐさでありますが、これはたしかに、機械的物質文明が生み出したかなしき教養の一つであります。

人生はたゞ單に物質ばかりで成立してゐるものではありません。また、人間はたゞ肉體のみで生きてゆけるものではありません。私たちが、御飯に向つて合掌する心もちは、御飯そのものをたゞ偶像的におがむのではなく、御飯をとほして、私たちをはぐくみそだてゝくれる一切のものに感謝をさゝげることなのであります。

道元禪師の『永平清規』の中に食事の機會に、是非とも心得ねばならぬことを清規としてお定めになつてゐます。それは五觀偈といはれてゐるものであります。

永平寺に參詣さしていたゞくと、そこで、食事をさせていたゞくときのおはし

容れの上がきにこの五觀偈が私たちの目につきます。

一、功の多少を計り彼の來處を計る。

二、己れが德行の全缺を忖つて供に應ず。

三、心を防ぎ過を離るゝは貪等を宗とす。

四、將に良藥を事とするは形枯を療せんがためなり。

五、成道のための故に今の食を受く。

といふのであります。第一ケ條の意味は、私たち普通毎日三度づゝいたゞく御飯は、いよいよ私たちの口に入るまで大變な手數を煩はしてゐるものであることは、今更くどくどしく申し上げるまでもないことでせう。お百姓たちの汗と油と血のかたまりをいたゞいてゐるのでありませんか。この尊い手數をしづかに味はうべきだとのきびしき御訓戒であります。百丈禪師は「一日作さざれば一日食はず」とお示しになつてゐますが、まことに尊いおいましめであります。

第二ケ條は、はたして私にはかうした尊い手數のかゝつた御飯をいたゞくだけの資格があるかどうか、たゞ、徒食を貪つてゐるのではないか、なにか世の中のためになつてゐるだらうかと深い反省が要求されてゐるのであります。

第三ケ條は、食事に對して私たちはいつも無限の欲望をおこすものであります。日本料理にしても、支那料理はいふに及ばず、いろいろなものが、次から次へとならべられませう。これはみな私たちの食慾を客觀的に、連續的に、具象化したものであります。一汁一菜のすがすがしい食卓では、どうも、腹の虫がおさまらぬといつたやうなことから、思ひのまゝに御馳走をならべたてるのであります。茶、煙草、酒、菓子等々、これらはみなあくことのない私のみにくい慾望が、そのまゝ外面にあらはれた姿に外なりません。かういつたことはまことに相すまぬことであるから、なんとかして、反省をふかめ、食事の節制をつゞけべきだといふお示しであります。

第四ケ條は、食事に對して、すききらいとか、贅澤をいつてはならぬ。『遺敎經』に、「諸の飲食をうけては正に藥を服するが如くすべし、よきに於ても增減を生ずることなかれ」とおほせられてゐますところから、この條のお示しが出たものでせう。私は食事の小言をいつてはすぐあとからこのお示しをかみしめて反省さしていたゞいてゐます。

第五ケ條は、まことに尊いきはみであります。いまこの食事をうけたものは必ず將來に成道すべき責任を負はねばならぬとのきびしいおいましめであります。

已上の五ケ條は食事に際して何人も眷眷服膺すべき要項であります。かやうに食事に際してもその機會を見失はずに修道に資せねばなりません。私たちは、少くとも日に三度の食事を惠まれながら、かゝる尊い機會をもちながら、うつかりそれを見のがすのですが、慚愧にたへないことであります。

――對食の詞――

御本山ではつとに私たち信徒の修養向上に資するために對食の詞を御制定になつてゐられます。

○食前のことば

吾今、幸に佛祖の加護と衆生の恩惠とによりこの美しき食を饗く。
つゝしみて食の來由を尋ねて、味の濃淡を問はじ。
つゝしみて食の功德を念じて、品の多少を撰ばじ。
いたゞきます。

○食後のことば

吾今この美しき食を終りて、心ゆたかに力身に充つ。
願くばこの心身を捧げて、おのが業にいそしみ、誓つて四恩に酬ひ奉らん。

ごちそうさま

以上のおことばであります。この御慶事を機會に皆樣と一緒に、食の前後に必ず實行したいものであります。

先哲の法霖師に對食偈の撰があります。「粒々皆是れ檀信、滴々悉く是れ檀波」の一句は師の肺肝よりほとばしりいでたものであります。愼んで味の濃淡を問ふことなかれ。愼んで品の多少を問ふことなかれ」の句は前にあげた御本山御制定の「食前のことば」にあたります。「若し不足の想念を起こさば、化して鐵丸銅汁と爲らん」との警句はおそろしききはみであります。最後に「上法門の干城と爲り下苦界の津筏と爲らん、普く諸の衆生を敎化し、共に安樂國に往生せん」とありますが、熟讀すれば、くめどもつきぬ妙味があります。先哲のおごそかな敎養には尊いものがたくさんのこされてゐます。

――横川法語と報恩講式の一節――

横川の源信僧都の御法語に

「先三惡道を離れて人間に生るゝことおほきなるよろこびなり、身はいやしくも畜生におとらんや。家はまづしくとも餓鬼にまさるべし。心におもふことかなはずとも地獄の苦にくらぶべからず。世のすみうきはいとふたよりなり。このゆへに人間に生れたることをよろこぶべし」

とありますが、いふまでもなく人間に生れた好機會を見のがしてはならぬとの御教誡であります。私たちは、この生れがたい人間に生れてきたのですから、これをよろこばいではよろこぶことがありません。同時にまた、この折角のよろこびを無駄ごとにしてはすみません。

また、『報恩講式』のなかに、

「弟子四禪ノ線端適貫キ南浮人身之針ヲ曠海浪上ニ希遇アレテヘリ西土佛教之査ウキキニ。爰依コヽニテ祖師聖人之化導ニ聽キ法藏因位之本誓ヲ歡喜滿チ胸ニ渴仰銘スレ肝ニ。然則レバチ報ジテモ而可キハレ報大悲之佛恩。謝シテモ而可キハレ謝師長之遺德ナリ。」

とありますが、これは先づ人身のうけがたきことをお示しになり、四禪天より一本のいとすぢをたれをろしたところが、たまたま欲界の一人のもつてゐた針のみぞに、そのいとすぢがとほつたといふ不可思議の因緣をもつて、人間に生をうけることの深い因緣を示されたものであります。また次に、人間に生をうけることもなみたいていのことではないが、更にみ佛の教法にまふあひたてまつた大事をよろこぶことを示されて、盲龜の浮木のたとへをあげられたものであります。かやうに不可思議な因緣でもつて、人界に生れ佛法に遇はしていたゞいたのですから、この好機會をとりはづしてはならぬことを、ねんごろに教誡せられたものとうかゞひます。

——機會と僥倖——

さてみなさん。機會を見失ふてはなりません。といひますと機會を見つけることはなかなかのことだらうとお考へになつてはなりません。機會は二六時中、私たちの生活中にあるものであります。生活のすべてが卽ち大切な機會なのであります。世の中に、機會さへあればとかこつ方もあります。それは薄志弱行の徒の口實であります。機會を見失ひがちなものゝ辯解にしかすぎません。「求むるにその道をもつてすれば、則ち得ざることなし。爲すにその時をもつてすれば、則ち成らざることなし」と古人もいつてゐますが、今日をとらへねばなりません。他日もあるからといひぬけてはなりません。過ぎゆく時をとらへ、時々刻々を善用するところに機會の眞意があるのでせう。世の中には、ときどきこの機會といふ意味を誤解して、なにか、僥倖をしあてたときのことを機會をとらへたと思つ

てゐますが、それは、おほきなあやまりであります。たゞ、偶然の時のはずみに乘つてなしとげた事業は決して永續するものではありません。眞の機會は盡して行ふところにあるものであつて、射倖的な、富くじのやうなものと考へては全くの誤解であります。

ところで現代の社會、若くは人生には、機會がみちみちてゐるのであります。自分が空疎でないかぎり、そこで、なんらかを發見することができます。かういふ意味から機會を見失はないためには平生の敎養がまことに大切なものとなるのであります。私の生活にみちみちた機會をはつきりつかむことのできるやうの敎養は平生のうちに育てられるべきであります。そこで、次に敎養といふことについて少し述べてみたいと思ひます。

二　教養について

——平生心是道——

教養といふ言葉は既に現代に於てはカビくさいやうにも思はれがちですが、いつの時代でも教養によつてこそ、すべての人は自己をかたづくり、また人生をかたちづくるものであります。個人の教養を豫想せずしては文化の進展といつたことはのぞまれないことであります。だから、教養といふ言葉はいつも清新なものであり、嚴肅な響をもつべきであります。文化價値の實現は必然的に個性の教養を要求するものであります。いふまでもなく教養といふことは、平生の心がけであります。禪家の名高い問答に、

「如何なるか是れ道」。「平生心是れ道」。

とありますが味のある問答であります。

——見方の相違——

教養の相違からすべて世界の見方がかはつてまゐります。

「君！　すまんが、ちよつと、壹圓かしてもらひたい」「ちよつと壹圓かせて、君！　壹圓で電車の回數券が十七枚買へるんだで、それで、おれは一週間はたらくことができるのだよ、ちよつとなんてさうやすやすいつてもらひたくないね」、

なんでもない會話の一節ですが、金錢に對する兩人の見解が全くちがつたかたちであらはれてゐます。この見解のちがひめは、ひとへに、金錢に對する教養の相違からくるものだと思ひます。壹圓の價値について、甲はきはめて簡單に考へ、乙はよほど重大に考へてゐるところに教養の相違があるのでせう。

或る富豪の一家言に、「十分間、電車にのつて六錢の賃金を支拂ふことになつてゐるが、十分間に六錢の利子を生み出す元金について考へてみると、むやみに電車にも乘れない、」

まことに傾聽に價することでありませんか、金錢に對する教養についても、かやうに、おごそかでありたいものであります。かう味つてこそ初めて金錢の尊さを知らしていたゞきます。

また、春の海をすべるやうに航海してゐる船あしを見て

「あゝ、いゝ氣分だ、こゝから見ただけでも、春の海路の旅行は氣もちがよさうだ。」

「あゝ、いやだ、あの船あしを見て、急に船酔氣分になつた。ゑづきがきさうだ。」

この二人の船の旅行についての教養が正反對であるために、かやうなひとりご

とが、思はず各自の口からもれたものでありませう。客觀的にみて船あしには、いゝ氣分も、わるい氣もちもないでせう、とはいへ、この二人にはたしかに「いゝ氣分」と「わるい氣もち」とのちがつた世界がでてゐるのであります、ほんとうに、世の中は面白いものでありませんか。

――一處四見――

佛教のうちに一處四見といふことばがあります。一處といふのは、どんなものでもといふことです。四見といつたのは、いろ〳〵の見方が出來るといふことであります。

例せば、今私どもの飲む水といふものについて考へて見ても人間は水と見てゐますが、天人はこれを瑠璃地と見、魚類は棲家と見、餓鬼は火と見るといつた風に、それ〴〵宿業がちがつてゐますから、卽ち教養が違つてゐますから、同じ水

でもいろいろに見えるといふことであつて、とりもなほさず、世の中の一切の物は、それらと交渉をもつてゐるものの心の影だといふことを示したものであります。

私は、平生なんでもないことにむかつ腹を立てやすいのですが、そんな場合には、世界のすべてがしやくのたねになり勝です。

また、時たま、いゝ氣分の時がありますと、世界は、かう、のんびりと、なごやかな風光に見えるのであります。かやうなことは、私の反省を待つての上の出來事ではなくて、なんといひませうか、それはそのまゝ見たまゝの姿なのであります。そこで、罪とがもないものまで、私の腹立ちのそばづゑをくらふことがあります。いたづらに戸障子につらくあたるといつたやうにです。

古い俗謠に「兎角御覽よ浮世は鏡笑ひ顏すりや笑顏」といふ句がありますが、うまくよんだものです。電車の車掌さんに切符をきつてもらふときに、「や！ありがたう」と一言お禮の言葉を出すと。その電車にのつてゐる間なんとなくなごやかであります。御笑話になつて恐縮ですが、あばたの女の方でも、若しその方を自分の妻として見れば、顏中、ゑくぼの配列とも見えるといはれてゐます。「あばたもゑくぼ」といふではありませんか。またかなしき句に「十五夜は座頭の妻の泣く夜かな」とありますが、明月に對しても、盲人を主人として貞節に仕へてゐる妻にとつては、仇にでも遇つたやうな、いきどうりと悲しさを感ずるにちがひありません。

もとより月に悲しい月も、うれしい月もないわけですが、ながめる人の心によつて悲喜の情の對象となるものであります。ですから、悲しい月もうれしい月も全くながめる人の心の影にしかすぎません。人間には嘔吐を催すやうないやなものであつても、豚には御馳走であるかも知れません。

人の教養の如何によつて、氣品のある世界も生るれば、むさくるしい世界もあ

らはれてくるものでせう。

「くわいらいし首にかけたる人形箱鬼を出さうと佛出さうと」

これはあまりにも名高い句であります。だが、いつの世でも肯啓に價する眞理をよんだものであります。私たちの教養ほど大切なものはありません。小學校の先生が子供に母の名を尋ねたところ、「山の神といひます」との答によつて、その子供の家庭の教養の程度が誤りなく想像出來るときいてゐます。若し、世に恐るべき掟がつくられたとすれば、その掟に對するくだらない批評よりも、この恐るべき掟の生れ出た所以を探ることが、なにより先決問題であります。而も、その所以をひとへに自分自身のうちに求め得たとき、そこに、慚愧と反省と懺悔と發奮とを結果します。かやうにして社會は始めて一歩よりよき道程にはいるのでありませう。

――鐘と旅僧――

ある田舍に貧乏寺がありました。住職は度々かはりましたけれど、長くゐる寺男だけは更らずに、朝晩、時の鐘を撞いてゐました。

ある日のこと、みすぼらしい旅僧が、村端のかけ茶屋にいこひながら、ふとこの鐘の音をきいたのです。「あゝいゝ音がするな。こんなありがたい鐘の音は、方々歩いてゐてもめつたにきいたことがない」と、言ひました。この話が茶屋のお婆さんの口から傳はると村の人達の噂にのぼつたので、いまゝで無關心だつた人たちまでが鐘の音に耳を澄ますやうになりました。

「なる程ありがたい、いふにいはれぬ音がする」と、みんなが言ふやうになりました。この鐘の音は二三ケ村にまでひゞきわたるのですが、その村の人たちも噂をするやうになつて、いつしか有名な鐘になつてしまひました。

「ソレお寺の鐘が鳴る」、といふ、と床の中で泣く子までがだまつて耳を澄ます
といつた風でした。
いつかの旅僧がまたかけ茶屋に見えました。
「私を覺えてゐるかな。」
「ハイハイ、覺えてゐますとも、寺の鐘をお褒め下さいました、和尚樣でござ
いませう。」
「ありがたいあの鐘の音を、もう一度きかうと思つてまゐつたのぢや。」
ちやうど、入相を告ぐるお寺の鐘が鳴りひゞきました。旅僧は、うつむいて聽
いてゐましたが、顏色をくもらせて「撞く人が變つたと見えるな。」
「はい、長く勤めました寺男は去年亡くなりましてございます。」「あゝ左樣か、
道理で安穩な朗らかな音が聞かれないと思つた。」
「それは、どうしてでございますか。」

「いかなる鐘も撞けば鳴るであらうが、信心の籠つた鳴音には草木もなびくと
いふ話がある、どうしてそれが人の心に感じないことがあらうか。私の褒めたの
は、信心のこもつた鐘の音ぢや。」かくて旅僧はさみしげにいづくともなく立ち去
つたとのことであります。この話をうかがつただけでよくわからしていたゞきま
すことですが、信心のこもつた鐘の音はいつでも、すがすがしい音をたてるもの
であります。このお話のうちにも教養の尊さを味はふことができます。

——支那の見聞——

私は七八年前に支那旅行をさせていたゞいたことがあります。只今ではさうで
もありますまいが、その當時の北平での見聞であります。あちらこちらの警察署
の門前の掲示場に、罪人が衆人環視のもとに斷首の極刑に處せられてゐる寫眞
が、れいれいしくはりつけてありました。よほど勇氣を出さねば見られないほど

の殘忍な場面であります。多分、斷首に價する極惡人なのでせう。だが、青龍刀でなんの用捨もなく首をきる場合なのですから、たれもが目を當てゝみられない場面であります。にもかゝはらず、その寫眞にはもの珍らしさうに斷首の光景を見いつてゐる人たちも寫つてゐました。しかし、私の見たかぎり、日本人が一人もその見物中にまじつてゐなかつたことに意を强ふしました。さすが、東洋の君主國の敎養をうけたものはちがつたものだと、心の底から喜んだことでありました。こゝにもまた、尊い敎養のことわりを知らしていたゞきます。

——酒客のいひ分——

昔から酒客のいひ分ほどたくみなものがありません。

「賞與が思つたより多かつた、一つ祝杯をあげやう」

「賞與が少なかつた、なんだ馬鹿々々しい、やけ酒だ」

「寒いから、寒さしのぎに、一杯」

「熱いから、暑氣はらいに、一杯」

「しばらくだな、いろ〳〵面白い話もあらう、一杯くまうか」

「勝つたぞ、さあ、祝勝會だ」

「負けた時は、酒でも呑んで忘れるんだね」

大體、世の中のことは、矛盾したことを同時に認めることのできないやうに約束されてゐる筈ですが、酒だけは、全然矛盾したことも、共に認められて、同時に言ひ分となるやうであります。酒客は決して自分の意志で飲まうとはいはないらしい。なにか、客觀的の狀勢は飲まざるを得ないやうに仕向けた口實をとらへるものであります。それで、咽喉から手が出てゐるのであります。虎視耽々として呑む機會をねらつてゐるのであります。

「今日から斷然禁酒する、だから禁酒祝に一杯」

とは、酒客のいひ分をいちばんよくいひあらはしてゐます。このことが酒客の教養をそのまゝうちだしたものだといつてよいでせう。

——たしなみといふこと——

たしなみといふことは、教養のかへことばであります。このたしなみは、人生生活の間隙をよくふせぐものであります。

利休居士の茶の一家言として傳へられてゐるものに

「茶は贅澤なあそびごとではない。それは人と人との間に自然のうちに持ちあはされてゐる和敬とか愛親の情をすなほにあらはすためにつかはれる方便である。だから、その作法はまことにおごそかであつて、個性の身を慎み心をみがくための修業となるべきものである。そこで、人生のあらゆる態度を、この作法のうちに織りこんで、細心の工夫と、周到な用意と、おちついた研究をかさ

ねるものだ」

といはれてゐますが、まこと、利休居士の生活様式には寸分の隙がなかつたやうであります。人生は實は隙だらけだとの自信をもつた大閤秀吉も利休居士の隙のない天分には頭があがらなかつたやうであります。

覺如上人御撰述の『御傳鈔下』第三段によれば、一人の山臥—辨圓—がおそろしい心もちで板敷山を幾度かさまようたが、聖人におあひして目的を達せなかつたために、遂に禪室までお訪ね申したところ、

「上人左右なくいであひたまひけり、すなはち尊顔にむかひたてまつるに、害心たちまち消滅して、あまつさへ後悔の涙、禁じがたし」

この一段を靜に拜讀すると、お聖人様のそのときのお顔つきが、まざまざとおがめるやうですが、左右なくいであひたまふその御態度には寸分の隙もなかつたことども窺はれますが、この場合個性のたしなみといつたやうなことよりも、更

に、神々しいお姿であり、さながらの慈容であつたことゝ尊くありがたくおがませていたゞきます。

また、わが御本山の御祕藏にかゝる高祖聖人の往生論註御加添本についてうかがひますと、建長八年七月の御加添になつていますが、高祖聖人はその時は八十四歳の御高齢であられたやうであります。しかも御家庭のうちに御心を煩はされたこともあり、信徒の動搖もまた御苦勞のたねであり、その日その日の御日暮しもおいたわしいかぎりでゐらせられたとのことであります。その中で、建長四年開版の春日本の往生論註を御求めになつて、佛恩報謝のため、自信敎人信のため老の目をしばたゝきながらうす暗い火影のもとで懇念に御加添あそばしたものと承つて、勿體至極のことゝ感佩致しますのでありますが、これもひとへに高祖聖人の御平生の御敎養のしからしむるところとうかがいますことであります。

蓮如上人の御敎養については御一代記聞書などによつて、すでにすでに御聞き

及びのことでせうが、申すもおそれおほいほどのことであります。

當御法主樣は御承知のとほり、滿一ヶ年の軍隊生活を終へさせられ本年一月九日に拔群の成績で御退營になられました。御在營中は學科といひ實修といひ最優等の御成績をお示しになり、崇高圓滿なる御人格と相まつて、師團全體の模範であらせられたと承つてゐます。平素の尊い御敎養によりさこそと拜察致します。

三　佛心者大慈悲

——慈光中の生活——

敎養の大切なことを述べさしていたゞいたのですが、それでは、私たちはどういふ敎養をもつべきかが次におこる問題であります。それは、お慈悲のもとにすなほな日暮しをさしていたゞくことが、私たちへ惠まれてゐるたゞひとつの敎養

なのであります。

お慈悲といふことを、わかりやすく窺ひますと、攝取不捨といふことであります。攝取不捨とは、「おさめとつてすてず」といふことであります。先づ「おさめとる」といふことは、私ども人間の世界でも行はれてゐる事實でありますが、然し、人間の世界に於ける「おさめとる」といふことには、局限と公正ならざるものとが伴つてゐます。なぜかといひますと、私どもの世界では、智慧のあるもの、學問のあるもの、才覺のあるもの、富めるもの、腕の力のあるもの、美貌のもの、若い元氣なもの、といつたやうに、なんらかの特徴が「おさめとる」ことの、重要な條件となつてゐるのであります。ですから、それと反對に愚鈍なもの、無學のもの、虛弱なもの、年老いたもの、醜いものは、「おさめとる」圏内から完全に除外されてゐます。世の中には轗軻不遇に泣いてゐるものが多いではありませんか、つねに不安におのゝくものは少くないではありませんか、更に善惡とか、

能、不能とか、美醜とかの選擇も、常に公正であるならば、それ自身に意味もありませうが、そこにはややもすると、すききらひとか、血のつながりとかいつたやうなことが、その選擇採用「おさめとる」といふことの基調をなしてゐるために、明朗でない不公正が、時々つきまとつてゐるやうであります。ですから、「おさめとる」といふ言葉だけきくと、まことにきこえもよいやうでもありますが、さて深刻にその消息をうかゞひますと、隨分、みにくい、むさくるしい内容が、暴露されるやうであります。これに對して、佛の慈悲の内容としての「おさめとる」とは、人間の世界から、すげなく、けおとされて、このせちがらい世の中で、全く生きる力を見失つた不幸なものを、先づ最初に、お正客として「おさめとる」のであります。

筆が少し横道へはいるかもしれませんが、近代の私どもの世界の特徴といへば、すべての人生を、科學的方法といつたやうな、或る種の鑄型にあてはめて、

考へなほさうとしてゐることであります。すべてのものを、悉く科學的研究の對象とするものですから、神聖なものとか、不可思議なものとかは、いつとはなしに、その神々しい姿を消したやうな感があります。一例を擧げますれば、魏々たる山岳に對する、氣高いあこがれ心をすてはてゝ、「日本アルプスを征服した」といつたやうな、ぎこちない、あらちけない氣分になりがちとなりました。また昔は心を主とし、物を伴としたものでありました、だからお「蔭樣で」といつたやうな溫い會話が人々の間に常に交換されてゐたものです。ところが現在は、物が主であつて心が伴となつてまゐりました。ために、「儲かるか、まうからぬか」、「食ふか、食はれるか」といつたやうな、ぎこちない會話が、繰り返されてゐるやうであります。かういふ現代人の心理は、政治も、法律も、單なる人間相互の契約に過ぎないものだと考へてゐます。また宗教などを信じなくとも、良心を標準として、道德が維持されるとも考へたり、神祕不可思議なことを信じなくとも、

世の中が渡られるものだとも考へて、ひたむきに人間の力にのみ信頼する結果となつて參りました、いゝことか、わるいことかは別として、どうしたものか到るところに、不安の感が潜在してゐるやうでもあります。

不安といふことは、誰でもが、經驗する心理でありますが、頼みにしてゐるものあて力にしてゐたものが、實際に役立たなくなつた時は、そこに、いひしれぬ不安に襲はれるものであります。だが、そのうちに、金でもつてあらゆる不安を一掃しうるものと、あきらめてゐる結構人もゐれば、一時の健康をたのんであてにしてゐるものもあり、地位と權力とに腰かけてゐるものもあります。これらでもつて人生の不安は、手取り早く、とりのぞかれるものであれば結構なことですが、あてになりさうなものが存外あてになりませず、裏切られ通しで、良人は妻を、妻は良を、友人が友人を裏切るといつたやうな、幻滅の悲しみに泣くことが少くないではありませんか。だが無論、不安といふことに神經衰弱にかゝつては

なりません、また不安を贅澤な趣味として取扱つてはなりません、宗教上の說法で、常にきかされてゐる「不安」といふ言葉は、どうも、私たちにはピンとこないのは、恐らく、不安を贅澤な趣味として取扱つたり、神經衰弱にかゝつてゐるからでありませう、だがなんといつても、不安はいつの時代にも、事實としてつきまとつてゐます。それは如何に世を擧げて科學的方途に出ましても、こればかりは、どうすることも出來ません。

ところが、不安の感をいだいてゐるものゝ常として、なんらか、力强いものに、しつかといだきとられて、そこに自分の安住を得ようと期待してゐます。だが、こゝに注意せねばならぬことは、この場合、極めて滑稽じみた、また、きはめて安價な對象に、而も盲目的に、自分の不安が託されてゐることであります。この事實は現代のやうに、教育の普及を見、科學の進步をみながら、枚擧に遑のないほどの迷信が、多くの民衆の心理を支配してゐることを見ましても、それが

推知されることであります、ビク〳〵した、イライラした、落着かない現代人の心理は、自らの誇としてゐる文化を裏切るやうな迷信でもつて、幾分でも慰められようとしてゐることは、それ自體矛盾なことであり、魔可不思議な珍現象ではありませんか。こんな迷信では、根底の深い、現代人の不安は、とりのぞかれるものではありません。現代人の生活は、何と忙しいことでせう。また、なんと餘裕のないことでせう。ほんとに、つかれきつてゐるやうです。おびやかされ通しではありませんか。そしてなんとはなしにいらいらしてゐるじやないですか。この神經衰弱症狀は、たしかに、おさめとられないところから生れたものであります。こゝにみ佛樣のお慈悲のやうに、心の底から全體を請け容れて下さるものが、ひたすら願望されてゐるのであります。

次に不捨「すてず」といふことはどういふことかと申しますと、おさめとると同じ意味であります。「おさめとる」といふことと、「すてず」といふことゝ、同意義

を二度も重ねられたことに、み佛様のやるせない、御慈悲心がはつきり出てゐるのであります。ところで人間の世界では「すてず」とはいひきることができません。なぜかと申しますと、凡そ人間の世界では不幸はとめどなくつゞくものですが、ことに不幸なものは、破鏡の苦をなめた婦人でありませう。つまり、一度請け容れられて後、何等かの事情で捨てられた婦人は、なんといつても不幸なものです。だが、近頃、こんな不幸な婦人方も、かなり澤山あるやうです。また世の中には、馘首(くわくしゅ)(首をきる)といふ殘酷な言葉もあるではありませんか。若い、元氣な間(ま)にあふときは、ちやほやと、歡迎されたものも、よる年浪に身體の自由も、思ひにまかせぬやうになりますと、馘首が待ちまうけてゐます。無論、だれもが、その運命にぶちあたることの豫想はあつたにしても、さていよいよとなれば、大した貯蓄もなし、家族は多人數だといつたやうなことで、悲慘な出來事もかなりあるやうに聞いてゐます。元來、永久に請け容れられることを、要望する

ことは、人の常でありますが、優勝劣敗、生存競爭、落伍、淘汰などと種々な姿で、私たちはおびやかされどうしではありませんか。

ところで、み佛様の御慈悲には、「捨てず」といふことを「おさめとる」といふことの上に重ねて、慈悲の至極をあらはされてゐます。一度おさめたかぎり、決して捨てないことに、周到な用意が、なしとげられてゐるのであります。世に滿ちみちた苦惱に、身うごきもならぬ不幸なものを、罰せず、さばかず、せめず、そのまゝ、請け容れて、その上どうしても捨てぬといふところに、み佛様のお慈悲が完成されてゐるのであります。かやうな大慈悲が、私の信仰となることによつて、私たちの生き方に、根強い土臺が出來あがるわけであります。

凡て私たちは、私一人の力で生きられるものではありません。お百姓さんも、お百姓さんだけでは、斷じて生きられません、お商賣をなさる方でもその通り、また、婦人の方にしても、婦人の方々だけでは斷じて生きられません。親子兄

弟、夫婦縁類、全人類、全宇宙すべては、網の目のつながりのやうに、みなつながりあつて、生かされてゐるものであります。一本のマッチ、一粒の米のうちにも、言葉ではいひつくせない、大切な犠牲が織り込まれてゐる筈です。ですから、私共は獨りで生きてゐるのではなく、すべてのものから、深いちぎりで生かされてゐるものであります。獨りで生きてゐるのであれば甚だ心もとない、弱いものでせうが、私一人の生きる爲に、すべてのものが必要條件となつてくれてゐるのであり、私一人生きることが同時にすべてのものゝ生きることでもありますから、心丈夫に、體ゆたかに、堂々と、生きぬくことができるのであります。だが、私どもは、この朗かな事實を見失つて、おこがましくも、獨力で生き得たやうに思つてゐるのであります。そこに苦腦の種がめばえ、不安と焦躁がとめどなくつゞくのであります。自分ひとり生きぬくとの獨斷から明朗ならざる人生が、くりひろげられるものであります。たとへば夫婦の間でも、毛の尖ほどの祕密が

あれば、祕密そのものは、極めて微細なことがらでありませうとも、それから起る種々の結果は、どれほど大きな波紋を畫き出すかわかりません。その祕密のあるといふことは、お互に信じあはないからでありませう。

信じきれないとは、またどうしたことかと申しますと、獨りで生きぬくといふ誤算がもととなるのであります。百年までもともしらがと誓つた夫婦ですもの、深いつながりで、お互に生きるため溫い條件となりあつて生きてゐる筈であります。だから些細なことでも、あらはにうちあけあつて、夫は妻の心の中をすべて知り、妻は夫の胸の裡を、丁度自分の胸のうちのやうに、わかつてゐれば、決して暗い影のさすすき間がない筈です。それがお互に信じあひきれずに、腹の探りあひをしてゐるやうな隙に、必ず猜疑といふ恐しい、惡魔が乘じて襲つてくるものであります。夫婦は家庭の主體であります。夫婦間の祕密は恐らく、子弟の心を暗くし、一家を、明朗にしないでありませう。不明瞭な家庭は、陰慘かぎりな

原で活動映畫を眞似てゐる子供等は、恐るべき深い古井戸が、草深い中で、祕かに彼等を呑まふとしてゐることに氣がつきません。

無知から來るあやまちほど怖しいものはありません。その野原の持主である百姓さんは、古井戸の危險を知りつくしてゐますので、はら〳〵しながら子供等に親切な注意を與へましたが遊びに熱中してゐる子供達は、その親切な注意をきゝいれもせず、刻々危險が近づいて參ります。そこで百姓さんは見るに見かねて、子供の側へはしつていつて、親切心から一人二人づゝ、こわきにかいこんで、安全な場所まで連れ歸つたのです。古井戸の危險をよく知りぬいた百姓さんの智慧は、當然、身のほど知らずに遊んでゐる無知な子供達を、助けずにはゐられない慈悲を呼び起したのでした。みなさん。立撮卽行のあのお姿をしつかりおがましていたゞきませう。決して、のん氣なお姿ではありません。み佛樣のお慈悲の全貌をそのお姿のうちにおがむことができるのであります。

「無明長夜の燈炬なり、智眼くらしとかなしむは、生死大海の船筏なり、罪障をもしとながかざれ。」

この御和讃こそみ佛樣の智慧と慈悲とをお示し下されたものであります。

——母性愛——

母の愛は清く美しいものであります。この清く美しい而も力强い母の愛によつて、病める子供をもその瀕死の狀態からよく救ひ出し、失意のどん底に自暴自棄におちいつた子供をも、再び更生の心境に、ふるいたゝさねばおかぬものであります。

報いを求める愛はまだ小さいものです。本當の母の愛は決しい直接子供から報いを要求しないところにあります。たゞ愛せずにはゐられないのである。子供を立派に育て上げようとするのは、さうせずにはゐられぬ本能的な感情からであり

いものです、それについても、私たちは常に、心の明さを、保たねばなりません。心の明朗はひとへに、生かされてゐる自分の生活に思ひ到ることから生れます。生きてゐるのではなく、生かされてゐる事實を確認することが大切であります。それがためには、み佛樣のお慈悲をしづかに味ひつゞけることです。み佛樣は、すべてのものが、私の生活への溫い尊い條件であることの事實を、御自身の上に御示しになつて、お慈悲をたれてくださるのであります。

——慈悲は智慧より——

大體、慈悲といふことは、佛心でありまして、「佛心とは大慈悲是れなり」とお經に說かれてゐますが、力强い思ひやり、たゞ思つただけではなく、事實み佛樣の境地まで導くのです。また人間の愛といつたやうなものを、遙かに超えた無我の愛、沒我の愛といふことであります。さて、ものを與へるといつても、與へる

といふ聲ばかりではなにもならんので、それでは與へたことになりません。與へるものを、必ず受けとらしてこそ、そこに與へるといふことが成立つのです。與へるすがたが、與へられる相手になりきるのではなくては、ほんとでないのです。母の乳は、母が子になりきる姿なのです。そこに母の全分の愛が完成するのであります。私どもの世界では「與へるぞ」「與へるぞ」といふ聲だけきこえて參りますが、どうもそれが聲だけで一向姿が見えません。單に、與へるといふ聲だけでは、却て、苦惱の眞只中にゐるものを苦しますだけです。むしろそんな聲をきかない方がよかつたかも知れません。これでは與へるといふ事實が完成しないのです。ですから、人間の世界では、どうも徹底した慈悲といふことはあり得ないと思ひます。

そして、この大慈悲は、智慧の眼の開けたところから生れて來るものであります。眞實の智慧は必ず大慈悲となつてあらはれずにはおかぬものであります。野

原で活動映畫を眞似てゐる子供等は、恐るべき深い古井戸が、草深い中で、祕かに彼等を呑まふとしてゐることに氣がつきません。

無知から來るあやまちほど怖しいものはありません。その野原の持主である百姓さんは、古井戸の危險を知りつくしてゐますので、はら〳〵しながら子供等に親切な注意を與へましたが遊びに熱中してゐる子供達は、その親切な注意をきゝいれもせず、刻々危險が近づいて參ります。そこで百姓さんは見るに見かねて、子供の側へはしつていつて、親切心から一人二人づゝ、こわきにかいこんで、安全な場所まで連れ歸つたのです。古井戸の危險をよく知りぬいた百姓さんの智慧は、當然、身のほど知らずに遊んでゐる無知な子供達を、助けずにはゐられない慈悲を呼び起したのでした。みなさん。立撮卽行のあのお姿をしつかりおがましていたゞきませう。決して、のん氣なお姿ではありません。み佛樣のお慈悲の全貌をそのお姿のうちにおがむことができるのであります。

「無明長夜の燈炬なり、智眼くらしとかなしむは、生死大海の船筏なり、罪障をもしとながかざれ。」

この御和讃こそみ佛樣の智慧と慈悲とをお示し下されたものであります。

——母　性　愛——

母の愛は淸く美しいものであります。この淸く美しい而も力强い母の愛によつて、病める子供をもその瀕死の狀態からよく救ひ出し、失意のどん底に自暴自棄におちいつた子供をも、再び更生の心境に、ふるいたゝさねばおかぬものであります。

報いを求める愛はまだ小さいものです。本當の母の愛は決しい直接子供から報いを要求しないところにあります。たゞ愛せずにはゐられないのである。子供を立派に育て上げようとするのは、さうせずにはゐられぬ本能的な感情からであり

ます。ですから、母性愛は獻身的なものであり、人間生活に於ての根幹をなす最も大切なものでありますから、家庭生活の基礎であり、從つてそれが社會生活の最も大事な單位でもあるのです。

母と子とはもともと一つであつた、その一つが分裂して母と子になつたのであります。母と子とはきつてもきれぬ關係に成立つてゐるものであるから、自分の身を殺して子供のために計らうといたします。子が喜べば自分のことのやうに喜び、子が病めば自分の肉體の一部が痛むやうに心配し、夜の眼も寢ずに看護もするのであつて、母にとつては子供は完全にわが身の一部分なのであります。

母の愛は「惜みなく與へる」愛であります。この愛こそ光り輝く尊き愛の姿なのです。凡そ世の中で、眞に人を幸福にするものは與へる愛であります。他から愛せらるゝことよりも、他を愛することに喜びを見出し得る人こそ、眞の愛をつかんだものでありませう。求める愛には屢々滿たされない不滿がのこることがあり

ますが、與へる愛には決してさうした不滿はのこらないものであります。

母の子に對する愛は惜みなく與へる愛であつて、惜みなく與へることによつて限りなき喜びを感ずるものであります。それは決して、義理や娑婆氣からではなくて、與へずにゐられないからであります。

ために、醫者から見はなされた病兒に對して、殆んど人間わざとも思はれぬ手厚い看護の手を伸べて、その眞心によつて瀕死の境から愛兒を救ふことができるのであります。こゝにみ佛のお慈悲がかすかにうかゞはれます。

育兒は、はたして、母性愛か、科學かといふ問題について、嘗つて、讀賣新聞紙上に於て、某氏が、米國と歐羅巴諸國との實例をあげてその結果を發表してゐました。

それは、生れて間もない乳兒や幼少年たちを、母親の手からきりはなして合理的設備のもとに保育するのと、從來のやうに各自の家庭で兩親の愛撫のもとに育

てるのとでは、結果においていづれがより效果的でありうるかについては、昔からいろいろ論議のあるところですが、こゝにこの問題に對する示唆ともなる興味ある調査があります。

それはウィン市の或る育兒院についての報告でありますが、その育兒院は誇りうる近代的な設備をもち、優秀な保育者のゐることによつて知られてゐるのですが、こゝで保育された子供たちと、あまり經濟的にゆたかでない、而も採光や、衞生狀態の劣つてゐる市街の家庭で、兩親の膝下で育てられた子供たちとくらべて見ると、不思議なことには二歳ごろから、身體も精神も、完全な育兒院で育てられてゐるものゝ方が、發育がおくれてきたさうであります。

また、アメリカで、豫め能力の均等してゐる子供たちを、甲組と乙組とにわけて、甲組を幼稚園とか託兒所で集團的哺育をつゞけ、乙組を一般家庭の上で個別的に育てゝゆきました。その結果を三年後に調査してみると、乙組の方が成績が

よくて、甲の方がわるかつたと報告されてゐます。

これらの事實はなにを物語るでせうか、いふまでもなく「母」こそ最適の養育者であることを示すものにほかなりません。ですから、育兒については、設備よりもなによりも人格的接觸こそ第一の要件であることを知るのが大切であります。このことが、母性愛のすぐれたものであり、科學の力がさほどのものでないことを立證するものであります。

かやうに、育兒のことにつきましても母性愛の大切なことを知るにつけても大悲親樣のやるせない御慈悲に育まれることが私どもにとつていかに重大な役割をもつかが、うかがひしられるのであります。

あぶない惡戯に夢中になつて、たれの制止をもきかうとしない幼兒も、母の乳房が眼に入ると、しかけたこともそのまゝに、たゞひたすらに、母の膝の上にはせのぼり、ちぶさにとりつくではありませんか。尊いものは母性愛であります。

四　眞宗行者の生活態度

他力の信を得させていたゞいてゐる人は、法悅を惠まれます、法悅の人は內からこみあがる悅をもつ人であります、內から湧きいでる悅の泉をもつ人であります。外部の事情よりいへば、信ある人も、ない人も一樣に煩はされます。健康であるとか、病氣であるとか、財產あるとかないとか、賢しいとか愚かであるとか、地位があるとかないとか、種々樣々な事情に煩はされ惱されます。されど信のある人はいつの時、いかなる場所でも、內から湧き出る法悅の泉をもつて居ります。これによりて慰められ潤ほされ勵まされます。信には必ず法悅が影の形にそふがやうに離れません。

他力の信心をいたゞいた人はすくはれた人であります。悅びの人であります。信は力であります、はたらきであります、じつとして居られなくなります、感謝

のはたらき手となります。報德の活動にいそしみます、自信の人は敎人信となり、大慈悲の宣布にいそしみます。

人は生活してゐる間は、衣食住は大切であります。物質上の問題はおろそかにすべきものではありません。それは信仰のある人もない人も同一であります。けれども信仰のある人とない人とは、精神の方向は反對になつてゐます。信仰のない人は、あつてもあつてもたりない、受けても受けてもたりない、一つかなへばまた二つと無際限に物慾に捉らはれ、若くは捉らはれ易い人であります。然るに信仰に生きる人は、さゝげる人であります。政治をする人は政治の上に報謝行をさせていたゞくのであります。實業に從事する人は實業に、敎育者は敎育に、布敎傳道の人は布敎傳道におしなべて報謝行をさせていたゞくのであります。信仰のある人は物質をおろそかにせぬけれども、それに捉はれません。その奴隸とはなりません。それに超えてゐるところに信仰の力を認めねばなりません。

かやうに信の人はのぞみに輝き、現在より來世にかけて永遠ののぞみに輝いてゐます。日々はこれ慈光世界への旅立ちであります。慈光世界への旅立ちと思へば、雨の日も風の夕も凌ぎよく暮せます。

見知らぬ他人に對して齒をむきだして吠へつく犬も、飼はれてゐる家の者にはたとへ、叱られても、尾をたれたまゝジッとその人の側に寄りそふものであります。溫順しくして寄りそつてゐなければ利益にならぬとか、養なつてくれぬからとかいつたやうな功利的な打算的な思想が犬には持ち合はしてゐるのではなく、たゞなんとなく主人が慕はしいのであらう。そして、たとひ叱られてもその側にゐるのが喜びなのであらう。この場合犬には主人に對して全くはからひのない純眞な信頼のみがあるやうであります。

曇鸞大師の『往生論註』には、

夫れ菩薩の佛に歸するは、孝子の父母に歸し、忠臣の君后に歸し、動靜己にあ

らず、出沒かならず山あるが如し。

と仰せられてあります。孝子や、忠臣の純な心の奥には、起つにも、居るにも、往くにも還るにも、何時も父母のことを思ひ、君后のことを忘れられないのであります。それは父母を大切にした方が得策だとか、君后に從ふてゐなくては生計が立たないからといつた、卑しいはからいがあるのではなく、たゞなんとなく、父母をしたい、君后を思ふ心が湧きでゝくるのであるります。自ら思はうとして思ふのではなく、父母や、君后の慈愛の深さが自然に思はしめるのであります。私たちが佛に歸する心もまたこれとひとしく、何處にゐても、何を仕てゐても心の奥底には何時も佛の慈光中に安住し、その御力をたよる思ひが潜んでゐるのであります、その心はそのまゝ佛の眞實心、慈悲心、智慧心より充たされたところであります。

私たちはいつも何らかをたよりとしてゐます。それがために心の底に落ちつき

があつて強いのですが、けれども、私たちの平生たのみとしてゐるものは、妻子、兄弟、師友、名譽、地位、職業、財産、健康、智慧、才能でありますがはたして、これらは眞實のたよりになるべきものだらうか、ほんとに嚴に批判して置く必要があります。親鸞聖人は

煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界は、よろづのこと、みなもて、そらごと、たはごと、まことあることなし、

との御實感を述べられてゐます。大丈夫だと思ふてゐるもの、常住の滿足を期待してゐるもの、一つとしてその期待にそふものがなく、みな、それを裏切るものであることに悲しまねばなりません。

然るに、一度佛の大慈悲を信じ、佛智の不可思議をたのませていたゞいてみれば、そこに初めて、動かぬ强さを實感させられます。この實感は私たちの心それ自らのはたらきによつておこつたものではなく、全く佛の惠ませたまふた、智

慧、慈悲、眞實の力の顯現なのです。

貧棒が貧棒でなくなり、淋しさが淋しみでなくなり、腹立たしさが腹立たしさでなくなることが、とりもなほさず、今日の苦勞を眞正面からうけこむだことであり、いひかへれば、私どもの苦惱を超えたことであります。その心境に住することができた人は勿體ないいひぶんでありますが、大悲の親樣は今日生きてゐる私の友人でもあり、また、父母兄弟夫婦でもあるのです。南無阿彌陀佛によつてはじめて親しき友を得たのであります。私は南無阿彌陀佛のためになにもした覺えがないにもかゝはらず、親樣は私にすべてを與へて下さつたのであります。傷つけられた心の持主にとつては、南無阿彌陀佛は尊いめぐみの母であります。だが、同時に私たちの生活態度が、おのづから、つゝましやかな謙讓な風格となるべきであります。最後に御開山上人の宗教生活の御風格を窺ひたいと思ひます。

御本典を拜讀させていたゞくと、三つの「哉」といふお示しがあります。卽ち最

初の『總序』の文に「誠哉、攝受不捨の眞言、超世希有の正法、聞思して遲慮することなかれ」とのたまひ、中ほど『信卷』には、「悲哉、愚禿鸞、愛欲の廣海に沈没し、名利の大山に迷惑して、定聚の數に入ることをよろこばず、眞證の證に近づくことをたのしまず、愧づべし、傷むべし」とあふせられ、最後の『後序』の文には、「慶哉、心を弘誓の佛地に樹て、念を難思の法海にながす」とのべられてあります。

この三哉釋こそ、御本典一部にあらはれた御開山聖人の信仰生活の御風格であります。

369
664

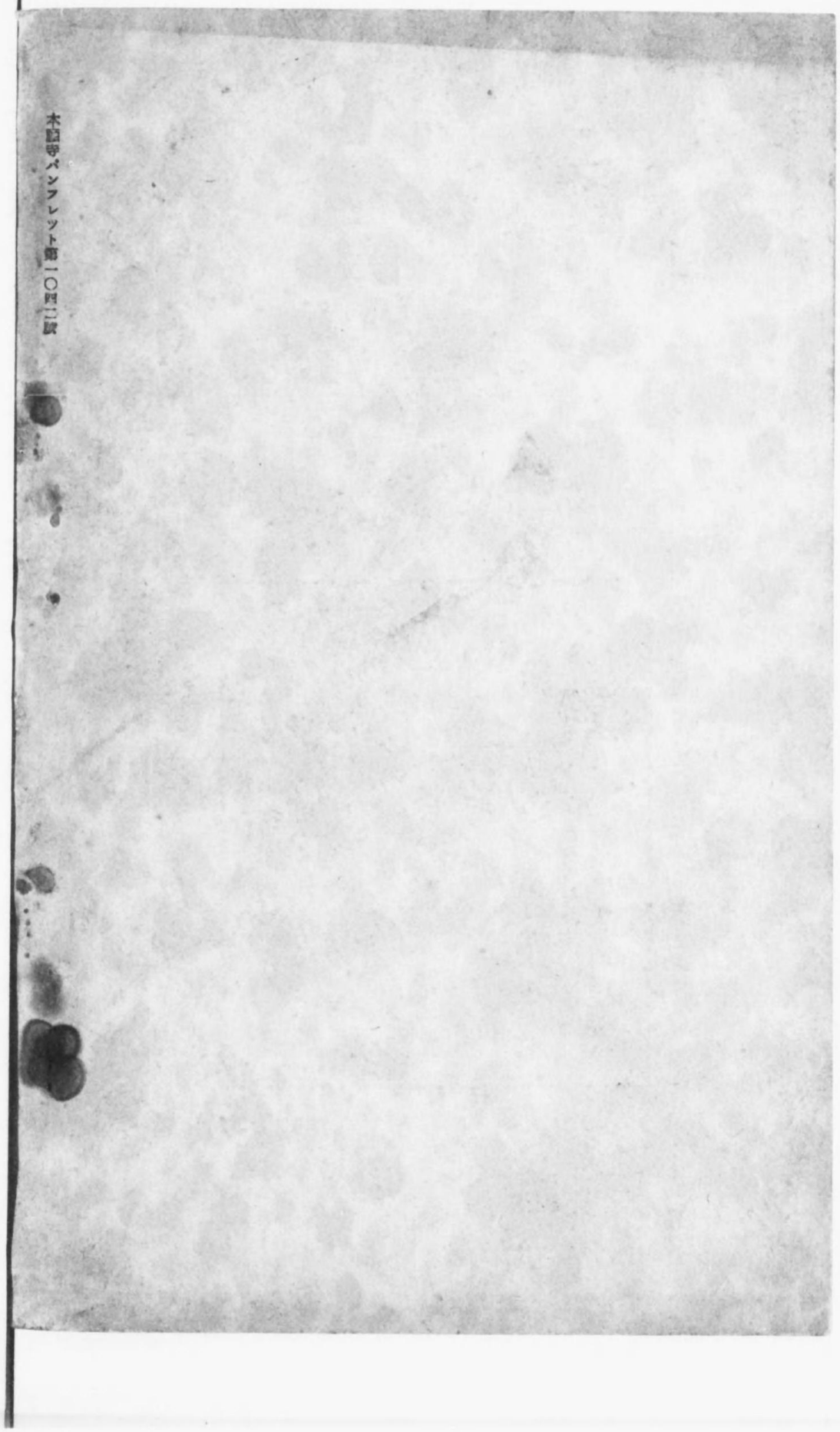
昭和十二年四月十日印刷
昭和十二年四月十五日發行

著者　玉置韜晃

編輯兼發行者　京都市西六條本願寺内　細川順寶

印刷者　京都市北小路新町西　須磨勘兵衛

印刷所　京都市西洞院七條南　内外出版印刷株式會社



終